

## 倉橋惣三との対話⑦

## 幼児期の「一人一人」と社会性の成長について(2)

浜口順子

(大学教員)

「ひとり・ひとり」という言葉の印象から

保育の現場で、保育者は、子ども一人ひとりと丁寧にかかわることと、クラス全体を見渡して保育を進めることを同時に行っているように見えます。しかし、具体的にそれがどのような可能になるのかはわかりにくく、保育者の熟練にかかっているともいわれ、経験不足の実習生などは「一人だけじゃなく、クラス全体にも目をやりなさい」とご注意を受けることになりがちです。この、一見矛盾するような、「一人一人」と集団へのまなざしの関係について、倉橋先生と考えたいと思います。

平成元年に幼稚園教育要領が改訂されて以来、幼児「一人一人」という表現がよく使われるようになりました。文部科学省のホームページに掲載されている英訳(仮訳)版では、文脈に応じて each child とか individual などと訳されていて一定ではありません。似た言い方として、ユニーク unique という単語も意味が近いでしょう。みんな違ってみんないい、という雰囲気という言葉です。

でも、「一人一人」には、もっと別のニュアンスが含まれていると私は感じます。「一人」という言葉をわざわざ二回繰り返す「一人一人」という語。その反復自体に、保育者のまなざし（思い）のあり方や営為（時間）を感じるのは。「ひとりひとり」と発音するときの、「ひとり・また・ひとり」と確かめるようにゆっくり繰り返す言葉だからこそ、倉橋先生はこの言葉を選択されたのではないかと思うのです。先生は、一九三四年の講義「児童心理」の最後のまとめで次のように言われています。

今まで考えてきたことは、児童心理の一般であつて、児童の実際はどこまでも一人一人である。児童というものは縦に考えれば発達の各段階に他ならない。しかも横に考えれば絶対的に一人一人である。この一人一人ということに重きをおかないで、一般的に児童というものは、<sup>注1</sup>と言いたいのが学問の特色であり、通弊であるが……。

「一人一人」は和語で、漢語を駆使するアカデミックな文章の中にあると違和感もあり、学術性に欠ける印象を与えます。倉橋先生がよく使われる「心もち」や「生活さながら」もそうです。「一人一人」に近い意味で、「個人」や「個性」などの漢語もありますが、倉橋先生は、「個性」という言葉は差異心理学を基に考えられたもので、他の子どもとの比較で見えてくる型である、しかし「一人一人」は型ではなくそこに本当の児童がある、とされています。<sup>注2</sup>他の子どもとの差異、つまり比較で見えてくるものは、その子どもの一面であつて、それだけがその子ではない、と。つまり、A君というある一人の子どもについて、その「個性」について語り始めれば、すで

に比較という方法に立った類型化、抽象化という認識が働き、そこにいる子どもの具体性から離れてしまうことなのでしょう。

## 「二人一人」を「群（グループ）」に見る

他の子どもとの比較を経ないで「一人一人」を見るとはどうすることなのでしょう。実習で注意された学生のように、その子だけを見ることなのか……というところ、どうもそれは正反対であることが、次の文章から気づかされます。倉橋先生の「就学前の教育」で「就学前教育法の特性」八項目の一つに挙げられている「社会的」の中で、次のように述べられています。

教育方法としての社会的ということとは、ただ集会的ということでもなく、集団的ということでもない。そこに十分なる相互の交渉の行なわれることを要する。（中略）幼児の年齢に適せる群（グループ）によって、その生活を相互ならしむることに努める。ここに於いて、教育の管理責任は一集団たる園または組、教育の責任単位は幼児一人ひとり、しかして教育の方法対象は群<sup>注3</sup>ということに考えられる。

「責任単位は幼児一人ひとり」の「責任」を responsibility とすれば、つまり、保育者がレスポンスするのは「一人一人」の子どもに於いてであると読むことができます。そして「教育の方法対象」は群（グループ）とすれば、保育者の意識は、複数の子どもたちの相互性が働いている群（グループ）に向けられており、その中の「一人一人」が浮かび上がるということなのではないでしょうか。

数人の子どもたちが群れて遊んでいる様子の雰囲気を感じながら各々の子どもの表情に思いが向くこと、あるいは、いざいざを起こした仲間たちが「誰が悪い」とか「そんなことしていない」などと主張しあっている際のそれぞれの子どもへの寄り添いなど、保育者は、ある集団内の全体的な雰囲気（相互性が生成する気配）を知覚し、それを「心もち」として受け取り、そこに関与している子どもが存在を「ひとり・ひとり・ひとり……」と感受するのかもしれない。そのような、実践的態度、専門家として習慣的になっている構えが保育者にはあるように思います。

群（グループ）から一人離れて遊んでいる子どもがいる場合でも、ぼつねんと孤立した一人なのか、超然とした一人なのか、群れへの葛藤を抱く一人なのか、保育者は直観的に状況から理解する。だから、一人でいる子どもを見る目もやはり、群（グループ）を意識していると言えるのではないだろうか。それは「比較」とは違うまなざしです。園という集団保育の中で「一人一人」を見るために、他の子どもとの関係性を踏まえるというのは、方法であると同時に、集団の中で生活するという形態をとる教育の目的そのものでもあると言えます。――続く――

#### 注

- 1 川上須賀子他『倉橋惣三「児童心理」講義録を読み解く』萌文書林 二〇一七年 p. 97
- 2 同 p. 97 - 98
- 3 倉橋惣三「就学前の教育」一九三二年（『倉橋惣三選集第三卷』フレーベル館 二〇〇八年 pp. 430 - 431）